埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

暴力をふるう子どもの背景にあるものに関する考察：不登校となった子どもの事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): violence, truant child, counseling 作成者: 杉山, 雅宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1374

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

実践報告

暴力をふるう子どもの背景にあるものに関する考察

――不登校となった子どもの事例から――

A Consideration on Why Some Children Resort to Violence:

A Case of a Truant Child

杉　山　雅　宏

SUGIYAMA Masahiro

Ⅰ．はじめに

学校で荒れる子どもは，いつの時代も教師の悩みの種である。2019 年度の小・中・高校における暴力行為の発生件数は 7 万 8,787 件となっている（文部科学省，2020）。学校がある日を 10 カ月（300 日）とすると，全国で 1 日あたり 263 件も起きていることになる。

少し前は反抗期の中学生の暴力沙汰が際立って多く，次は高校生であった。しかし 2013 年に小学校が高校を上回り，2018 年には中学校も抜いている。ここ数年，中高生の暴力行為は減っているが，小学生だけは増えていて，「暴力の低年齢化」としてメディアでも報じられた。

第 2 次反抗期の早期化により，小学校高学年児童の暴力が増えていると思われるかもしれない。しかし，暴力行為の増加率が大きいのは小学校低学年である。小学生の暴力は 2014 年度から急増しているが，2014 年度と 2019 年度を比べると，小学校 2 年生の暴力行為は 5.0 倍，1 年生では 6.6 倍に増えている。相手に怪我をさせた喧嘩や，教室内の器物損壊などが多いとみられる。

学校の普段の教室内で「死ね」「殺す」といった言葉が飛び交い，家庭内でも親に対して，あるいはきょうだい間で同じような言葉が発せられ，喧嘩が絶えないという。相談室で子どもたちからリアルタイムで伝えられる学校や家庭における子どもたちの世界は，ここ数年で加速度をもって大きく変化しているようだ。もちろん，かつての子どもたちがみんな品行方正で暴力的な言動がなかったというわけではなく，喧嘩もしたし，いじめもあった。しかし，何かが違っていたことは事実であろう。

以前の暴力は主として非行に走る一部の子どもたちの問題であった（朝長・福井他，2009）のに対し，最近の暴力はいわゆる普通の子どもたちに同様の傾向がみられることである（原田，2018）。それも低年齢から出始め，そして彼らは「悪いことをしている」という意識に乏しく，大人の言葉に耳を傾けない，注意されて，その場では黙ることも多いが，ふくれ面して内心納得しているとは思えない様子でいる。そして，また同じようなことを繰り返し，一向に改善する気配がみられない。結局，やっていいことと悪いことの区別が本当のところではついていない子どもたちが増えている。これは由々しき事態であると筆者は認識している。

筆者は，学校や教育支援センターなどの教育領域で子どもたちや保護者，教師たちの教育相談を行ってきた。そこでは，家庭や学校で暴力をふるう子どもたちに数多く出会ってきた。キレて暴力をふるったり，暴れて授業を妨害したり，学校内のものを壊したりして，目立つ行動を示す子どもは，一見すると扱いに困るように思えるが，実際には行動化により対応の手掛かりを得られることも少なくない。問題行動の表面だけにとらわれずに，その背景にあるものは何か，その行動をどう理解するかということを考えていくことは重要である。

子どもたちは，しばしば言葉ではなく行動で大

人に語りかけてくる。キレて暴力を振うことで，「かかわってほしい」というサインを出している。「自分の気持ちをわかってほしい」と思いながらも，素直に口に出すことができないのである。子どもは，気づいてほしい，真剣に向き合ってほしいと思っているのである。

しかし，親や教師は，顕在化している問題行動をとにかく抑え込もうと一生懸命になりすぎ，全体の関係性をみる支援を失いがちになるということを経験上感じている。大人たちが子どもの暴力に遭遇したとき，間違った対応をしないための理解のあり方や対応について考えなくてはならない。

そこで本稿では，子どもたちの暴力性とその心理的背景，そして社会的背景について考察をする。暴力について語るとするならば，攻撃性や人間性といったものを問題にしなければならないが，「変化している」という意味では，最近の子どもたちの暴力の問題は，生物としての攻撃性の異常というより，家庭や社会・文化的背景が深く関与していると考えられる。このことは，暴力が環境因的要素の強い心理から起こっていることを示唆しているのではないかと考えている。

Ⅱ．事　例

ここで紹介する事例は，個人情報保護の観点から，内容に影響のない範囲で，家族背景などは大幅に修正・創作したものを示した。

1．事例の概要

小学校４年生男子。両親と５歳年下の妹の４人家族。小学校２年のころから他の児童にちょっかいを出してはトラブルになることが多かった。母親は，「学校の対応が悪い」と，学校側の対応に対してはクレームをつけてくることが多く，家庭の協力は得られない状況であった。謝らせる練習をしたが効果がなく，ますますエスカレートしていった。２年生の２学期から学習活動に参加せず，登校をしぶることが多くなった。３学期からは不登校となった。たまに登校しても，しつこく友だちにつきまとうため，嫌がられることが多かった。自分の思い通りにならないため他の児童に暴力を振うようなことがたびたびあった。そのため，教室では孤立していた。家庭でも母親に対して反抗的になり，些細なことで怒り，包丁を持ち出したり，「50 回謝れ」と怒鳴ったりすることもあった。医療機関を受診したが，検査の結果では障害はないと言われた。

小学校３年生になり，不登校は改善されず，教育支援センターを紹介された。しかし，Ａ君は「ここへ来るなら学校へ行きたい」と言い，教育支援センターに通うことはなかった。そこで，小学校３年生２学期から通級指導教室に通うことになった。そこではＡ君の担当教師も受容的にＡ君の話をよく聴いていた。そのため落ち着いて授業を受けていたが，人前では強く緊張し意見が言えないなどの面もみられた。しかし，「ごめんね」「ありがとう」も言えるようになり，学習活動にも徐々に意欲的に取り組むようになった。しかし，小学校４年生になり，再びイライラが強くなり，死体などの残酷な絵を描くようになった。教室でも友だちに暴力をふるう場面が増えてきた。注意をしても，聞く耳を持たなかった。家庭でも母親や妹に暴力を振るい，何度も母親に謝らせたり，「言うことを聞かないと，妹を殺す」と母親を脅したりするようになった。母親は危険を感じ，緊急避難的に妹を祖父母宅に預けることもあった。

スクールカウンセラーとの面接で，Ａ君は大人を馬鹿にしたような口調で，「そんなこと言ったかな？」ととぼけていた。母親は，憂うつそうな表情で，責め立てるようにＡ君の暴力行為などについて告白してきた。

しかし，Ａ君はスクールカウンセラーとの１対１の面接では真剣な表情になり，「妹が邪魔に思うことがある」「パパはいつもイライラしている」「ママはすぐに外に出かける」「パパとママは喧嘩ばかりしている」などと語った。「Ａ君はみんなに仲良くしてほしいの？」と問いかけると，「そうだね，期待していないけど」と答えた。「僕が何を言っても，パパやママは僕のことをわかってくれない」「ママは，僕が近くに行くと，嫌がる」などと寂しそうな表情で語った。

Ａ君の母親は，高校生のころからうつ症状があり，リストカットや多量服薬があった。Ａ君を妊娠したときはまだ父親には別家庭があり，３歳のときに入籍。妊娠，出産時はとくに身体的な問題はなかったが，幼少期からＡ君はかんしゃ

くが多かった。父親はA君を嫌い，子育てに協力的ではなく，A君にかかわろうとしなかった。そのときの気分でA君を怒鳴ることもあり，A君もそのような父親の態度に怯えていた。母親もイライラしてA君を怒鳴ったり叩いたりしながら子育てを展開した。イライラを募らせた母親はA君が小学校入学前から時折，多量服薬で入院し，そのことは「Aが悪い」と語っていた。A君はその後，母親と離れられなくなり，ベタベタと甘えたかと思うと，突然怒って暴力的になったり，謝らせたりするようになった。母親や妹に暴力を振いながら悲しそうな表情になることもたびたびあった。

2. 事例の解釈

A君は，生まれてから「受け入れてもらう」体験が乏しく，両親のイライラのはけ口となっていたのである。そのため，A君は親に対して怒っていたのであり，また受け入れてほしいと切に望んでいたのである。しかし，それがなかなか叶うことがなく，クラスの仲間や妹，そして母親に対しての暴力や強制的に謝らせる行為でぶつけていたと理解できる。通級指導教室に通い始め，担当教師から受け入れてもらったA君は，いったん落ち着いたのであるが，その後の状態の揺れは，家庭のなかでの様々な出来事に影響されていたものと考えられる。A君は自分の存在を認めてもらえる居場所を提供され，信頼できる大人（通級指導教室担当教師やスクールカウンセラー）が聞き役となり，問題行動の背景にある感情にふれ，その感情を暴力ではなく言葉という形で表出させ，しっかり受け入れてもらう体験を通して，信頼関係が築かれたものと考えられる。

⑴ つながることの大切さ

学校現場でのカウンセリングといえば，内面の葛藤や不安を抱えている子どもたちに対して，じっくりと耳を傾けて話を聴き，彼らの気持ちを受容し，少しずつ心のエネルギーが充電できるように援助するイメージが強いだろう。

実際に，暴力をふるう子どもたちが，自分から相談室を訪れることはほとんどないし，どちらかというと，問題を起こして教師にさんざん説教され，「相談室に行き，カウンセラーの先生と話してきなさい」などと言われ，しぶしぶ相談室のドアを開けて入ってくるという場面が多い。「話すことなんてない」とふてくされる子どももいれば，「何をすればいいの」と困惑している子どももいる。そのような状況下で，カウンセリングなるものは可能であろうか。もちろん簡単なことではない。

彼らは幼いころからさまざまな問題を起こし，そのたびに親や教師などの大人から叱責され，ときには暴力で抑えられてきた。したがって，大人への反発や不信感が強く，相談室でも，「どうせまた説教されるだろう」と身構えていることも多い。

カウンセリングで最も大切なことは，つながることである。もともと大人に対する不信感が強い彼らとの関係づくりは難しい。まずは相手の話をよく聴かせてもらうことである。彼らは，「親や教師などの大人たちは自分の気持ちをわかってくれない」とよく言う。明らかに彼らの行動に非があり，話をしていることは矛盾だらけで，それはおかしいと説教したくなっても，とりあえず否定せずに話をじっくり聴かせてもらう。その際に，相手の言ったことや，やったことに対し，関心をもっているという積極的な態度をとることが大切だろう。「他の大人とは少し違うなぁ」「この人なら話を聴いてくれそうだ」と子どもが感じてくれることが大切である。それが関係づくりの第一歩となる。

しかし，この事例で難しいのは，A君の気持ちに共感することである。「妹を殺す」と言われたときに，同じような体験をしていないのに，「殺したい気持ち，わかるよ」と言うと嘘になる。少なくとも，その気持ちの推測はできても，感じることは難しい。だから，気持ちを共感するのではなく，共有するようにしたらどうだろう。「あなたは，妹を殺したいほど憎いのですね」と返す。共感するのではなく，共有しようと思ったほうが，支援する大人も楽に接することができると思う。

⑵ 居場所の提供

家で両親が喧嘩ばかりしている，親にいつも怒られているなど，家庭に居場所を感じられない子どもがいる。また，クラスに友だちがいない，勉強でもスポーツでも認められない，落ちこぼれのレッテルを貼られているなど，学校や家庭に居場

所のない子どもがいる。居場所とは，「自分の存在を認めてもらえる場所」であり，居場所があることで，そこに子どもが落ち着き，信頼できる大人がかかわってくれることによって子どもは安心感をもって成長していくことができる。

暴力をふるう子どもは，怒りを暴力という形で表現し，ときには執拗に暴言や暴力を繰り返す。何度も執拗に繰り返される問題行動により，周囲の友だちも疲労が蓄積し，次第に離れていってしまう。暴力をふるう子どものなかには，一人になるのが不安で，しつこく友だちにつきまとっていき，離れていこうとする友だちを暴力でつなぎとめたりする。クラスのなかでも孤立することが多く，仲間を求めて非行グループに入っていく子どももいる。彼らは同じような傷をもつ仲間と関係を築きやすく，徒党を組むことで強くなったように感じ，優越感を味わうことができる。このようにして，ますます学校での居場所がなくなるという悪循環が生じる。

後に考察するが，暴力の背景には，対人関係に基づく心の傷つきや不安がある。厳しい叱責や行動規制だけでは，暴力行為をなくすことはできない。信頼できる大人から，自分の存在を認めてもらい，支えてもらう場がなければ，傷つきは癒されず，いつ不安が怒りに変わってしまうかわからないという不安定な状態が続くことにもなる。大人が時間をかけて子どもたちの言葉に耳を傾け，その心の痛みや悔しさを受容することで，彼らは自分の怒りを暴力という行動化ではなく，次第に言語化という形で表出できるようになる。自分のどうしようもない感情を暴力ではなく言葉で表現する場，すなわち居場所が必要なのである。

Ａ君の場合，通級指導教室が居場所となり，「ごめんね」「ありがとう」が言えるようになった。

Ⅲ．考　察

1．家族の心理的背景

一般的に子どもがどのような心理を抱いているかを考える際には，時間的な経過とともに全体の構図を見通した視点が必要になる。それは，起きた出来事だけに眼をとらわれることなしに，彼らがどのような人生を生きてきたかに注目し，家族や周囲の者の言動や生活，関係性などを踏まえて心理的背景を考えていくという視点である。

暴力をふるう子どもの心理的特徴としてまず挙げられることは，Ａ君の事例からもわかるが，内心に強い怒りを抱いているということである。そして同時に，大人に受け入れてほしい，甘えたいという欲求と，それを拒まれるのではないかという強い不安も同時に抱いている。そして，彼らはそのようなアンビバレントな感情を言葉で表現することが苦手であり，暴力という形でしか表現できない。甘えたい相手に甘えを拒まれて，自分と向き合ってくれないことを怒っているのだが，より一層拒否されるのではないかという不安を抱いているため，その怒りを表現することもなかなかできずに困っているのである。生来の表現力の差もあるだろうか，彼らは自分の感情を受け止めてもらうという体験が希薄なために表現力が身につかず，そのために感情のコントロールも困難になったのではないかと推測できる。人は自分の感情表現を受け止めてもらう体験を通して，はじめて自らの感情を表現することに安心を覚え，そしてその感情を意識化できるようになるからである。

また，彼らは，現実の自分の存在を受け入れてもらえなかったことで，寂しさを抱き，自分は大丈夫という自分に対する安心感をもてないままでいる。そのため彼らは被害的な感覚で物事を捉えやすく，周囲の大人が行うしつけも自分を否定するもの，意味のない押し付けとして感じてしまうのである。結局，彼らはやっていいことと悪いことの区別ができないという，超自我の発達の未熟さや偏りがみられるようになる。彼らは暴力をふるって，勝ち誇っているのではなく，罪悪感や自分の感情をコントロールできない無力感にさいなまれている（大河原，2014）。

対人関係の面でも一方的になりやすい彼らは，孤立しやすく傷つくことが多い。仮にうまくやっているようにみえても，それは自信がないために周囲にひどく気を遣っている表面的な姿であり，真に打ち解けられない彼らは友人関係でも寂しさを抱きやすい。事例のＡ君も教室では孤立していた。

暴力をよくふるう子どもの親たちの養育態度のなかには，あるとことで甘やかし，あるところで厳しいといったしつけの線引きの曖昧さが存在し，親自身も感情のコントロールが悪いところが

多い（笠井・岡田，2009）。また，たとえば夫婦喧嘩が絶えない親が「暴力はいけない」と叱りつけたりする，といったように子どもに教えていることと矛盾した態度を親自身がとっていることが多い。そのため，子どもは混乱し，しつけ全般を，「親が楽をするために子どもに押し付けるもの」として被害的にとらえ，超自我が発達しにくくなるのである。つまり，両親は子どもを受け入れる余裕がなく，しつけと称してその場しのぎの対応をしており，ときには虐待的要素も含まれているケースも見受けられる。こういった家族では話し合いが成り立たず，論理によっての妥協，歩み寄りといった形をとりにくいのも特徴である。

2. 子育て環境の変化

暴力は環境的要素が強く影響した現象である。感情のコントロールの悪さなど，最近の子どもたちの精神構造の変化が指摘されているが（坂爪，2020），それもまた，社会変容に伴う家庭や子育ての変化が影響していると考えられる。日本の社会は子育てが難しく，親子ともに傷つきやすい社会になったということであり，これらのことが現代の子どもの精神に大きく影響を与えているのだろう。

以前にも増して少子化や核家族化が進み，家族形態はよりスモールサイズになってきた。それでは，家族はまとまりをみせているかといえばそうでもなく，男性のみならず女性の社会進出で母親も家庭にいる時間が短くなり，家族は集団として有機的に機能しなくなってきている。それだけでなく，きょうだい喧嘩や近所の友だちとの遊びなどの同年代の対人関係が少なくなり，幼い時期における情緒的なかかわりやそれにまつわる葛藤を処理する経験は確実に減っている。遊び相手が母親という実態も珍しくなく（ベネッセ，2015），母親との時間が増加し，関係が密接にならざるを得ない。そのような子育てに母親は負担を感じ，抵抗感すら抱くこともある。一方で父親は，急速にその権威を失ってきているが，権威を保とうと懸命に，ときには暴力的に支配しようとしたり，逆に母親の機嫌をうかがい，孤立を逃れようとしたりする者もいる。とくに自らが対人関係に苦手意識をもつ親のいる家族は，孤立し頑なで閉鎖的になり，そのなかでは互いに相手の態度に過敏になり，家族関係の悪化や偏りを招きやすくなっている。その結果，母親との密接な時間の増加にもかかわらず，子ども側は受け入れられているという感覚が持ちにくくなり，自分に一番になってくれる人は誰だろう，と不安を抱いていることも少なくない。

世間一般的に社会的な権威に対する反発と崩壊が起きているが，こういった社会全体の超自我の緩みから万能感と無力感が混在，潜在化し，それらは世代間境界の喪失や大人の子ども化を引き起こした（伊藤，2015）。そして，権利のみを主張するといった誤った個人主義の親たちを真似た，大人を馬鹿にするという子どもたちが増えることにつながったと思われる。

3. 暴力をふるう子どもの背景にあるもの

冒頭でも述べたが，子どもの暴力行為は，小学生だけが増え，暴力の低年齢化が問題となっている。子どもたちの個体的な側面，すなわち発達障害や関係障害などとの関連も無視はできないが，それよりも，未成熟さをもつ子どもと理解するほうがわかりやすいように思う。

このような対人関係的・情緒的未熟さの背景をなす家族特徴はあるだろうか。これらについての考察はなかなか難しいが，暴力をふるう子どもの増加と，自分の子どものことしか眼中になく，その子に何らかのトラブルが生じた場合，学校などに怒鳴り込んでくるような大人の増加や，子育て途上であってもパートナーシップを持続できずに離婚してしまうことの増加などが，同時並行的に起きてはいないだろうか。そして，これらに共通した対人関係的な特質として，置かれた局面がどのような状況であろうと，自他が対面し続け，関係を維持・継続することへの弱さということが考えられる（嶋崎，2018）。そして，これら関係性のなかに，問答無用かつ非対等な対人関係様式である暴力という要素が生起しやすいことは想像に難くない。

子育てをする側がこのようであると，親子関係にもその特色が持ち込まれ，子ども自身もまた，そのような対人関係的特徴のままに社会性や対人関係が成熟せずに，結果として未熟な形で暴力を行使しやすい傾向を子どものなかに孕みやすくなっているのではないだろうか。もっとも，人間

は感情的な動物であるから，このような家庭内での連鎖は大なり小なりかつてもあっただろう。しかし，近年，こうした特徴が急激に増加しているのではないかと気になっている。こうした連鎖の渦中にある大人であれ子どもであれ，それぞれが貯まった衝動を発散できる方策をもっていればよい。しかし，それらに出口がなく，悪循環に陥りながら，もはやバランスがとれない状態になっているなら，それは由々しき事態となる。急激に増加している児童虐待を形成する背景には，こうした側面も考えられるかもしれない。

4. 暴力をふるう子どもへの対応

暴力で訴えている本人の言い分を言葉で語ってもらうところからカウンセリングは始まる。彼らは前述したように怒りや不安，寂しさを抱えている。はじめは反抗的な態度をとることも多いが，内心では自分と向かい合って相手にしてほしいと望んでおり，自分の気持ちを批判なく聞いてもらえるという安心感が信頼関係を結ぶ糸口になるだろう。子どもを責める気もちになったり，逆に，子どもへの思い入れを強くしたりする場合があるが，それは相談にのる際の妨げになることもあるだろうから，自らの相手への想いを意識することは大切なことである。さまざまな感情を言葉で表現することが苦手な彼らは，まずは親や学校の教師に対しての激しい怒りや不信感などを訴え，ときには勝手な言い分や意見が出るかもしれない。しかし，それこそが今現在の本人の想いや姿なのであり，何事も押し付けと捉えやすい彼らに対し，そこで説教してはいけない。むしろ，彼らがなぜそういう意見をもつに至ったのかを考える材料とし，本人の気持ちに寄り添ってあげたい。程度の問題はあるが，「そうなんだ。あなたはそんなことを感じているんだね」と，肯定も否定もしない態度で受け止めるとよいだろう。自らの感情を表現し，自分の意見をもてるように導くことが大切である。そこに自分の行動への自覚が生まれるであろう。

また，子どもとの関係が壊れることを恐れるあまり，こちらが率直にものを言えない状態では事態が膠着する。傷つけすぎないように配慮は求められるが，あくまでも「暴力は絶対にいけない」というメッセージは送り続けなくてはならない。これは罪悪感や自分をコントロールできない無力感に苦しむ彼らにとってむしろ救いになる。ときには，叱られなければならない場面もあるだろうが，こちらがしゃべるばかりの説教では本人は言い訳を考えていたりで，結局は自らの行動を顧みる機会を失わせたりすることになる。叱った後でも，本人に少し考えさせる沈黙の時間が必ず必要となる。

終始，柔軟ではあるが毅然とした態度で，中立的・論理的に物事を進めるように努力することが求められる。そういう姿を彼らは取り入れていくことになるだろう。

引用文献

ベネッセ教育総研　2015　園外での遊び相手，友達から母親へ：幼児の生活アンケート　内外教育（6467）　9

原田曜平　2019　ゆとり世代の若者たち：最近の若者研究から　更生保護　69(7)　26-29

伊藤茂樹　2015　少年非行をめぐる社会的状況（課題研究　少年非行と非行少年処遇の過去・現在・未来）：子どもと大人の関係から　犯罪社会学研究（40）　14-26

笠井達夫・岡田涼子　2009　親の養育態度と青年の攻撃性との関係　徳島文理大学研究紀要（78）95-108

文部科学省　2020　2019年度児童・生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査

大河原美以　2014　怒りのコントロールができない児童を理解する枠組み　教育と医学（62）11　964-970

坂爪一幸　2020　感情のコントロールと不機嫌　チャイルドヘルス　23(3) 167-170

嶋崎政男　2016　むずかしい親との付き合い：クレーム問題から考える　こころの科学　197　24-28

朝長昌三・福井昭史・地頭薗健二・小島道生・中村千秋・小原達朗・柳田泰典　2009　児童生徒の特性からみた生徒指導の質的改善 ── 中学生の攻撃性について　長崎大学教育学部紀要　教育科学（73）　17-29